

1 主題名 「本当の仲間」 2－(3) 信頼・友情

資料名 『本当の仲間 ～情報社会に生きる～』（自作）

2 主題設定の理由**(1) ねらいとする価値について**

本主題で中心となる価値項目は、学習指導要領の内容項目2－(3)で「互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲良く協力し助けあう」ことである。

人は一人で生きているわけではない。家では家族に、学校では仲間に支えられて生きている。お互いが信頼し合い、尊重し合える仲間をもてるということは自分自身の心も成長させ、充実した時間を手に入れられることにつながるであろう。心から信頼できる仲間をつくる力を身に付けることはこれから社会に出ていく子どもたちにとって非常に重要と言える。しかし、それは難しい面もある。信頼できる仲間というのは最初からその関係ができるわけでない。仲間になる過程でいさかひやすれ違いもあり、それを乗り越えて信頼関係ができるのである。残念なことではあるが、それらを感じ取れずに仲間と疎遠になる子どもたちも増えてきている。

この時期の子どもたちは、自他の違いや相手の立場を理解し、支え合う態度が少しずつ身についてきている。しかし思春期に差し掛かり、自己のこれからの生活や友達関係や親子の関係の中での行き違いなど、悩みや葛藤を感じることも多くなっている。その中でお互いを信頼し、どんな状況でも協力し合える仲間を作ることは悩みや葛藤を乗り越える上で非常に重要といえよう。

近年、安価で手に入ることや防犯上の配慮から小中学生にもスマートフォンを含めた携帯電話が広く普及し、電話や電子メール、ソーシャルネットワークサービス（以下SNS）などで情報を交換する児童が増加してきた。友人関係を維持するためにネット上でのやり取りが欠かせなくなったり、ネット依存になったりする児童もみられる。ネット上での交友関係のトラブルから、いじめや自殺につながったケースもあり、社会的問題となっている。情報メディアは相手の姿や表情がはっきり見えず、安易ないたずらや心無い言動がとりやすい状況にある。これからの教育の場で取り組まねばならない課題であるといえよう。このような時代の中で、子どもたちがネット社会に左右されることなく友人関係を構築し、真の友情を深めていく支援をしていくことが重要である。

そこで、本主題では情報メディアを通した相手への思いやりや、メディアだけに頼らないコミュニケーションの大切さを理解し、いかなる状況でも相手の気持ちを尊重し、本当の仲間をつくらうという心情を育てていきたい。

(2) 子どもたちの実態（男子18名 女子15名 計33名）

本学級の子どもたちは、知識欲が高く何事にも意欲的に取り組む子どもが多い。また男女間の仲もよく、休み時間や放課後も男女分け隔てなく遊び、交流をしている様子が見られる。行事ごとに友達のよさや頑張っていることを聞くと、しっかりと友達のよさを認め合っていると感じられる。しかし、自分がしていることを同じようにできない児童に対しては、口調が激しくなったりつらくあたったりする面も見られる。また一人でいるクラスメートがいても自分から誘って声をかけなかったり、逆にそのひとりである子どもが自分から輪に加わることをためらったりする場面も見られる。仲間意識が強い反面、一旦グループから外れた子どもに対しての態度は冷たさを感じることも多かった。

これまで農山村留学のカッター研修等を通して、体力的な面で差があってもお互いのことを考え、協力し活動をする大切さを学んだ。また、体育の「ソフトバレーボール」では作戦を練

る中で、チームや友達の特徴を考えることで互いの苦手な部分を作戦で補い合おうとするような態度もみられてきている。

携帯電話やスマートフォンを持っている子どもはクラスの70パーセントを越えており、学校以外でもメールや電話など何らかの形で友達とのつながりを持っている子どもが非常に多い。現段階では情報メディアが関わったトラブルは把握されていないが、今後スマートフォンを使用する子どもは多くなることが予想され、情報メディアを使用する以前に、情報モラルとしての知識を身に付けるとともに、思いやりの心をもった判断力をつけておく必要があると考えられる。

現在の情報化社会の中では情報メディアの活用は必要不可欠である。本主題を通して、真の友人関係の構築の上で、情報メディアを通したとしても常に画面の向こう側にある相手を意識して、相手を尊重する行動することができる心情を養うことを目指せるようにしたい。

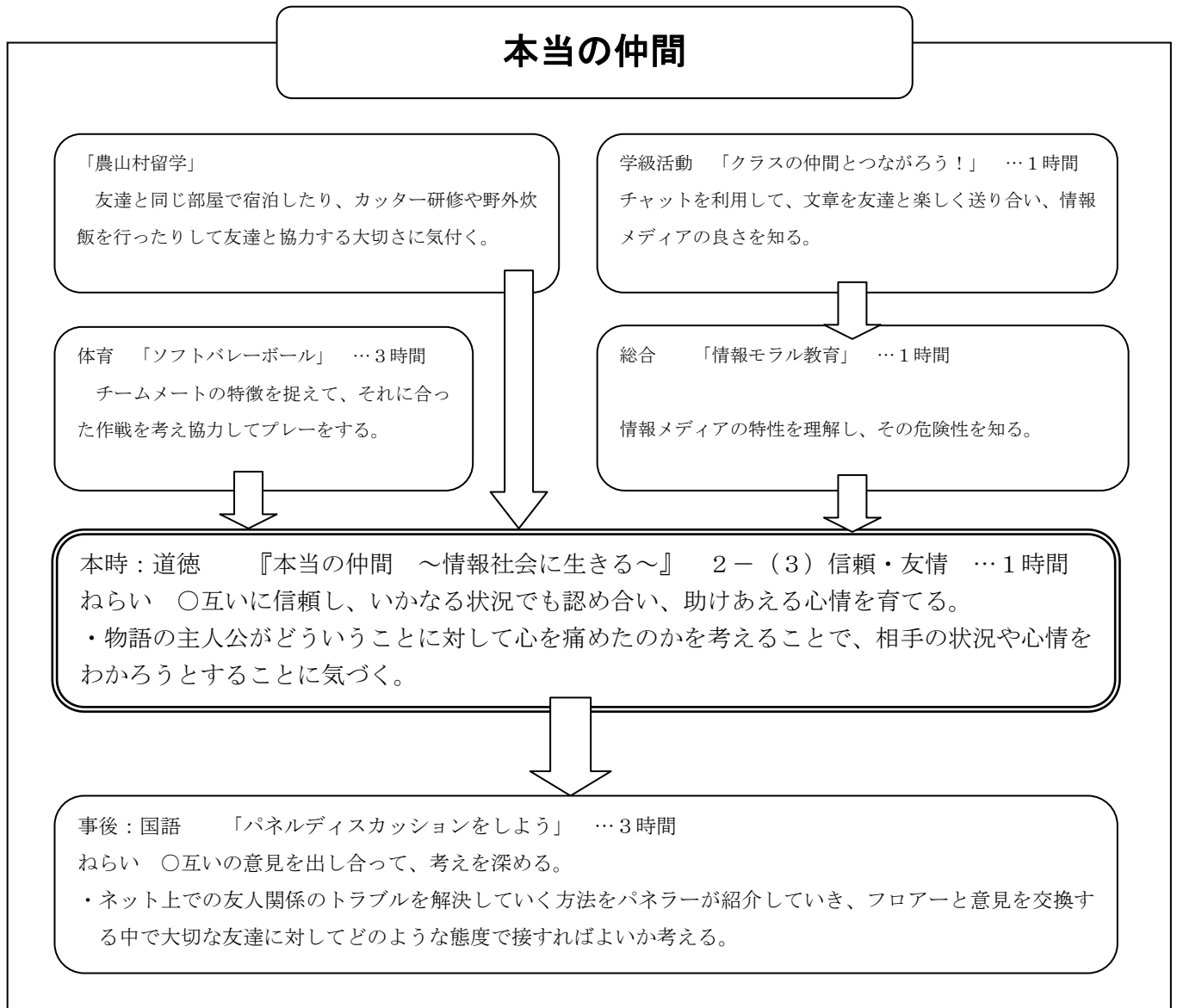
(3) 資料について

<あらすじ>

いつもなかよしの5人組は学校だけでなくSNSのグループ機能を利用してコミュニケーションをとっていた。そんなある日、ひとりの相談事にみんなが答えていたが、けんたからは読んでいないはずなのに返事が返ってこない。そのうち3人はけんたの批判をはじめ、ついにグループから外してしまう。翌朝、いつものやり取りが行われるが、けんたのメッセージがないことにあきはちくりと胸が痛む。

この資料は仲の良い5人がスマートフォンの無料通話アプリを使用する中で生じた問題を取り上げたものである。特に「既読をしたのに返さない」とこととそこから生じる「グループ外し」を取り上げた物語である。けんたをグループから外した日の翌朝のあきはちくりと胸が痛めているか、またグループを外されたけんたはなぜ返信できなかったかを考えることで、メディアを利用する際のマナーとメディアを通して変わらない「真の友情」について気付かせていきたい。

3 指導構想（他の教科との関連） 全9時間



4 研究の視点との関連

道徳的実践力を高めるための指導

○関心を生み、共感を高めるための資料提示（提示資料の工夫）

昨年度三校が統合し、二年目を迎える。普段の学校生活の中では、皆仲良く関わっているようにみえる。しかし一人ずつ話を聞くと、公には言わないが、クラスメートに不満を感じていたり、自分が陰で悪口を言われているように感じたりしている子どもも少なくない。また、以前に仲の良かった友達の一方が意図的に距離を置くことで疎外感を感じている子どももいる。現在は平和で静かな学級であり、表面的にはうまくいっていても何かのきっかけで問題が噴出してくることは充分予想される。そのため、現在使用していなくてもこれから利用が増えることが予想される無料通話アプリについての指導を通して、本当の友情について目を向けることが大切だと強く感じている。本学級の子どものうち70%がスマートフォンを含めた携帯電話を所有しているが、無料通話アプリを現在利用している子どもは多くはない。そこで、まだ無料通話アプリの利用経験がない子どもにも実感をもって問題を把握することができるように、実際の画面を使用した動画による資料提示を考えた。また、グループ外しの加害者や被害者ではなく、そのグループの中で一連の流れを見過ごしてしまった一人を主人公とした。それにより、「自分ももしかしたらやってしまうかもしれない」という共感もちやすく、自分自身の問題として考えやすいのではないかとと思われる。

○他教科・領域との関連を図る。(指導計画の工夫)

本単元は、情報メディアを制限させ使わせないための指導ではなく、情報メディアと上手に付き合い、情報モラルに則って使いこなす精神的土壌を育むことを目標としている。本時のねらいにせまり、今後につなげていくためには、正しい知識の獲得が必要となる。そこで事前の指導で総合的な学習の時間と関連させ、情報モラル教育を用い、特別活動ではメールやチャットの利用を体験させ、事後の学習では国語のパネルディスカッションで情報メディアとの上手な関わり方を討論することを考えた。道徳を中心に据え、他の教科、領域との関連を図る指導計画を設定することで、価値との関わりを一層深め、より道徳的実践力を養うことをねらうものである。

5 本時の学習指導過程（展開）

(1) ねらい

互いに信頼し、いかなる状況でも認め合い、助けあえる心情を育てる。 2－(3)

(2) 本時の展開

過程	学習活動・主な発問	ねらいにせまる手だて (○) と評価 (■)
導 入	1 前時に行ったチャットの感想を紹介し、楽しかったことや困ったことを思い出す。 ・普段できない会話をすることができた。 ・友達同士の会話を見ているのも面白かった。 ・スピードが速くてついていけなかった。	○前時の活動を振り返ることで情報メディアを使ったやりとりの面白さを思い出させる。 ○困ったことを紹介することで、今回の資料を理解するうえでの助けとする。
展	2 物語「本当の仲間」を視聴して、あきはどんなことに対して胸が痛んだのかを話し合う。 ○胸がちくりと痛んだあきは何を考えているのでしょうか。 ・自分の一言で仲間外れにしまった。 ・もしかしたら自分もいじめに加担したのではないか。 ・みんながけんたを攻めているときに事情を話せばよかった。	○あきのスマートフォンの画面をテレビに投影し、機能や特性に触れることで、物語を全員が理解できるようにする。 ○資料提示は現実味をもたせるために模擬画面をテレビに投影しながら教師が子どもの反応に応じて速さを調整しながら与える。 ○けんたが返信できなかった事情を考えさせることで、あきがちくりと痛んだわけを考えることができるようにする。 ○あき自身のとった行動とどの場面で後悔したのかを考えることで、あきがどんな行動をするべきだったのかを考えられるようにする。
開	3 本当の仲間だったらどのように無料通話アプリを使っていったらいいのか話し合う。 ◎もし自分があきだったらこのあとどうするだろう。 ・もう一度けんたをグループに戻そうとみんなに TALKで言う。 ・けんたの様子を伺う。 ・何も言えない。 ・直接会って話す。	○それぞれの事情を十分に抑え、背景にあることを深く考えさせる。 ○返信という行為が、どんなときにできるのかを考えることで、返信をすることだけが重要ではないということに気付くようにする。 ■ワークシートの書き込みから状況に流されることなく、友達のことを大切にしようとしている。

